

くずし字解説 ポイント集

立命館大学アート・リサーチセンター 安宅望

はじめに

- 。くずし字を読むための基本的なヒントをいくつかご紹介します。

最初に言い訳します

これからご紹介するのは、江戸時代から明治時代にかけて出版された主に木版で作られた「版本」と言われる書籍を読むためのヒントです

当時の方がプライベート記した手紙、あるいは事務手続きや役所に提出した文書類（古文書）、手書きで写した写本類などを読むには、多少役に立つかもしれませんが、それらを読みこなすにはまた別の訓練が必要です

しかし、寺子屋に行っていた子供たちや、丁稚小僧や遊女たちもおもしろおかしく読んでいた版本を、なんで現代の我々が読めないなどということがありましようや
ちょっとしたコツを覚えて、どんどん版本を読んでいきましょう

基本作法5則

- まづ版本を読むにあたり、基本として押さえておきたい5つのポイント
- ①くずし字解読は、日頃の訓練の積み重ねが上達への近道。たくさん字のパターンを見て目に覚えさせることが重要です
- ②平仮名のくずし字にまず慣れよう。都々逸や俗曲、川柳、狂歌といった短詩を読んだり、明治時代初期の印刷本を読むと、練習になります
- ③これまで勉強してきた古典の知識（百人一首や古典の教科書で習ったことなど）や歴史雑学などを総動員して「勘」を働かせながら読んでいきます
- ④150～200年前ともの言っても「日本語」であることをお忘れなく、「日本語として意味が通じるかどうか」を考えて読んでいきましょう
- ⑤かんたんに諦めない。読める字から読んでいき、意味の通る日本語に組み上げていくには多少根気も要りますが、じきに慣れていきます

翻刻作法5則

A R Cの翻刻システムを利用する場合の翻刻ルール

- ①旧漢字は新漢字に直して翻刻 國→国 舊→旧 餘→余 與→与 鹽→塩
- ②原則、促音（っ、ゃ、ゅ、ょ）はそのままの字で翻刻 城（じやう）色（しよく）
- ③踊り字に慣れる ㄣ→平仮名（爰：こㄣ） ャ→濁点平仮名（唯：たャ）
ㄥ→カタカナ（ヲㄥ） ャ→濁点カタカナ
々→漢字の繰り返し
／＼→単語・文の繰り返し（色々：いろ／＼）
- ④改行は原本に合わせて行います あとで見やすくなります
- ⑤一通り終わったら「縦書き表示」で出来栄えを必ず確認します→振り仮名が正しく振られているか確認するためです

解読のための5つのポイント

解読のヒントを5つに絞って解説していきます

①古人の表記美学について

決まったルールは無いが、昔の人が共有していた表記上の美学

②まぎらわしい平仮名

ちょっと見ただけでは区別のつかない平仮名各種

③踊り字に気づく

①に関連するが、多用される踊り字を見つける

④漢字か平仮名か

ある文字が漢字なのか平仮名なのか、日本語リテラシーが問われる

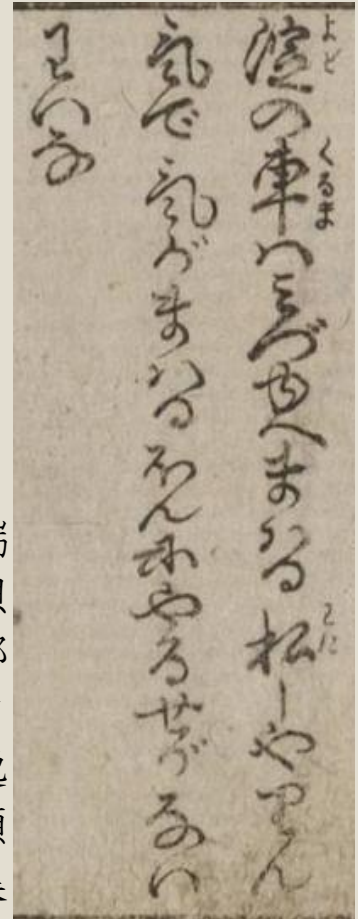
⑤固有名詞に気づく

人名の書き方、地名の書き方の特徴をつかむ

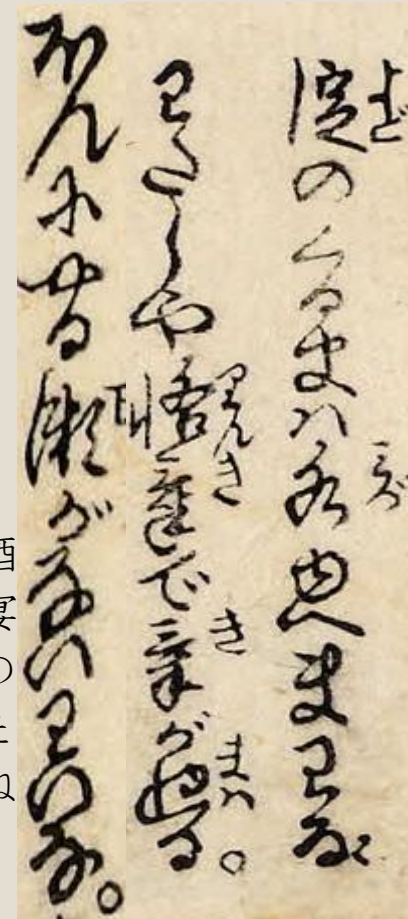
①古人の表記美学について

決まったルール(規則性)は無いが、昔の人が共有していた表記上の美学

一、ある文にどの字を使うかは、
書く人の自由に任せられます

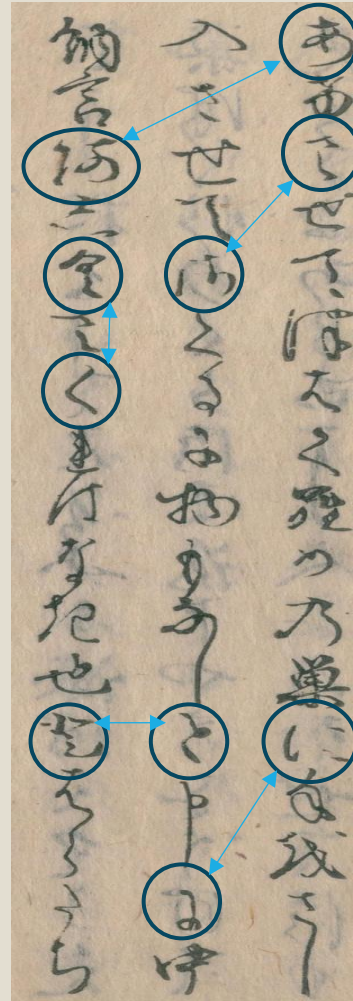


端唄都々逸類集



酒宴のたね

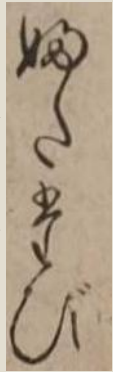
一、同じ文の中に同じ平仮名を極力使わない



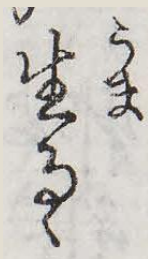
あけさせて、つはくらめの巢に手をさし
入させて、さくるに物もなしと申に、中
納言あしくさくれはなき也とはらたち

竹取物語

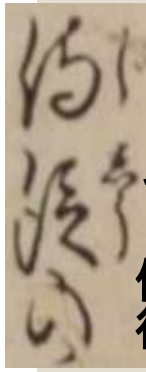
一、同じ字を重ねない(踊り字の多用)



ふたたび



うまるる



侍従



つつ

②まぎらわしい平仮名⁻¹

くずし字解読は腕立て腹筋と同じです。反復トレーニングで基礎体力を付ける＝たくさんの字を目に慣らせる

は

波

た

太

わ

和

し

之

け

計

か

加

ほ

保

ね

衤

の

乃

こ

己

き

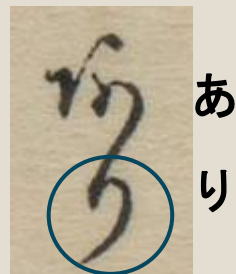
幾

くずし字として頻出するのは必ずしも現代の平仮名ばかりではありません。
上は現代の平仮名の字母となっているのは右の字です。昔の人は特別な規則があるわけではないですが、文脈の中で使い分けていました。

②まぎらわしい平仮名-2

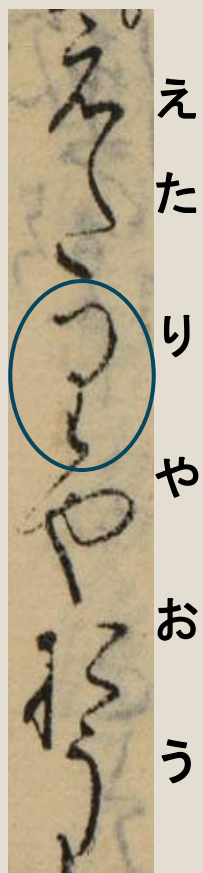
ちょっと見ただけでは区別のつかない平仮名各種

り (利・里)

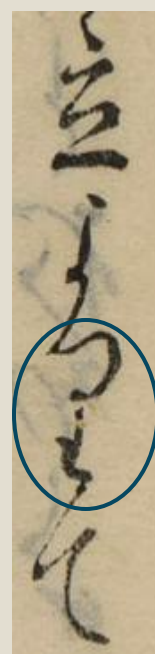


あり

利



えたりやおう



立よりて

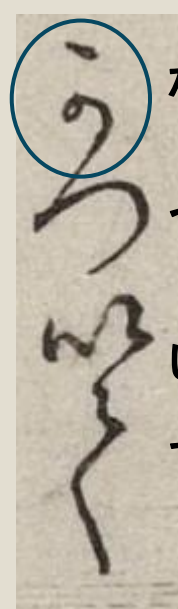
里

か (加・可・閑)



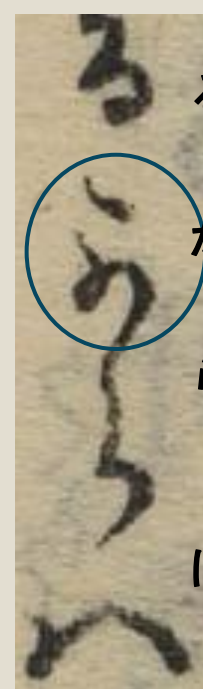
かかれは

閑



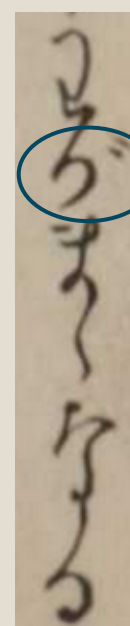
かついて

可



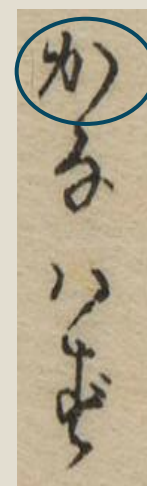
るから

可



わがまなる

可



かなはず

加

一、頻出の基本平仮名ですが、意外に間違えやすい字

②まぎらわしい平仮名⁻³

ちょっと見ただけでは区別のつかない平仮名各種

こ (己・古)

なればこそ今の

ことし十七に

ことを

ことの合字

こ

己

こ

おもむかしむ

之

さらしぬの

之

梅やしき

し (之・志)

じやまして

志之

一ツのこして

之

おしてたのめば

之

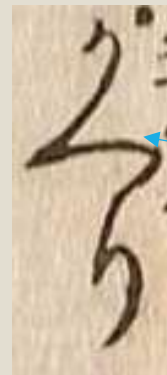
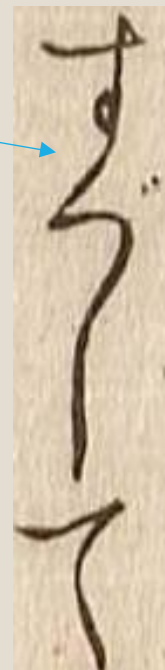
一、頻出の基本平仮名ですが、筆遣いの中で隠れてしまう字

②まぎらわしい平仮名⁻⁴

日本語リテラシーと勘で読む平仮名各種

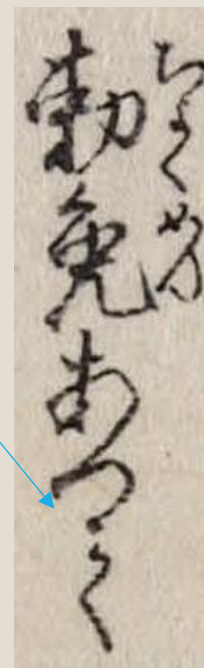
一、
文脈と漢字、勘を働かせて解読します
まぎらわしい平仮名

すぐして 過ぐして

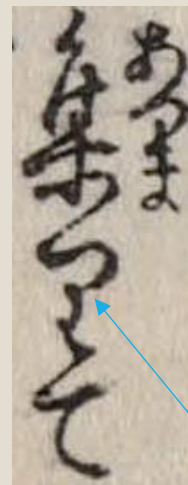


かへり

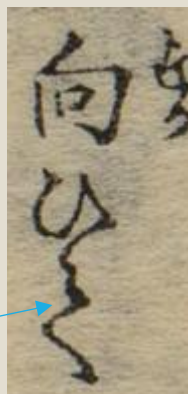
ちよくめん あつて



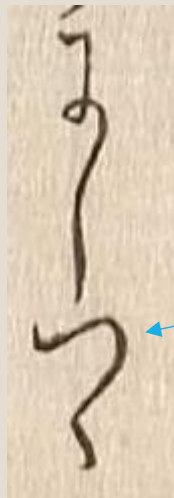
あつまりて



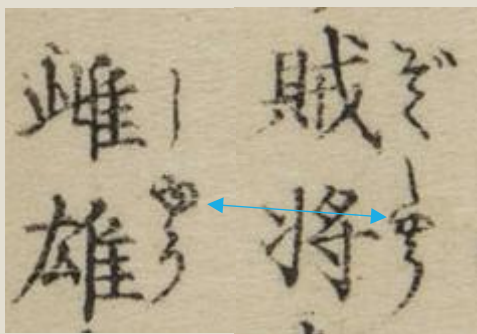
天
むかひて



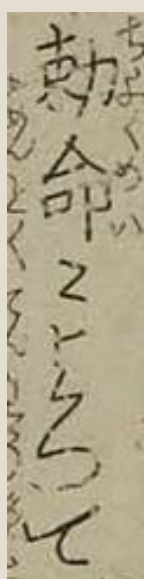
ましつ



ぞくしやう
也



しゆう
由



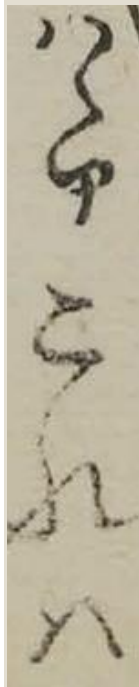
ちよくめいが読
めて、つてが読
めたら
言い回しとして
勅命によってと
思い当たる

「に」に字母は漢数字の二

③踊り字に気づく⁻¹

同じ字を重ねないために踊り字を多用します

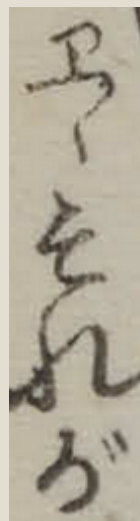
カタカナ一字
+踊り字



ハ、ア



ヲ、



エ、

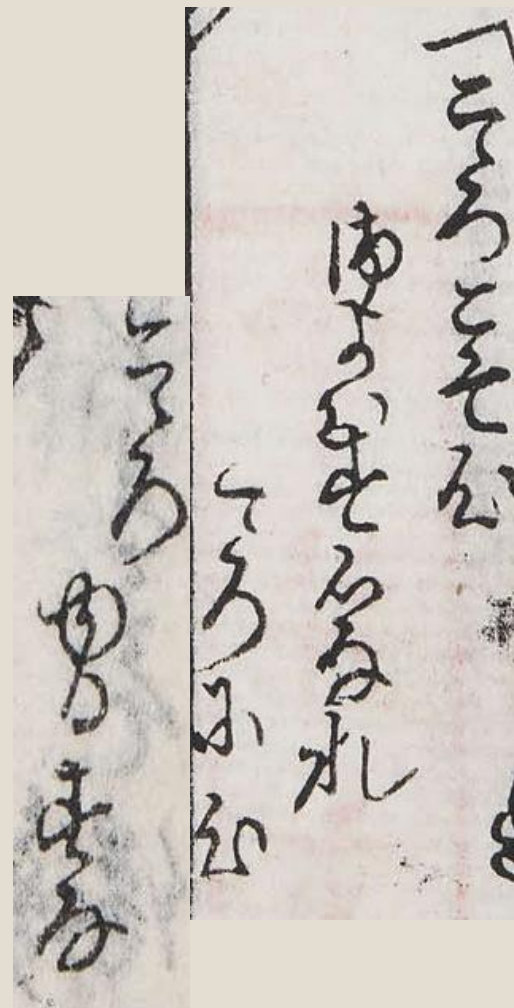


ア、

こころこそ心まよはす心なれ

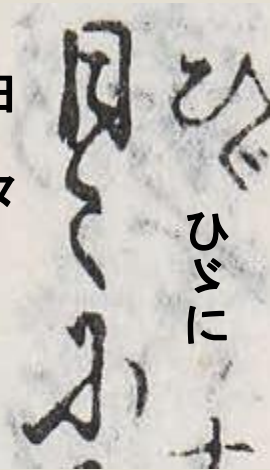
こころに心

こころゆるすな



平仮名一字
+踊り字

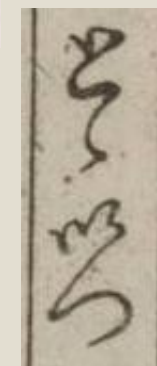
日
々



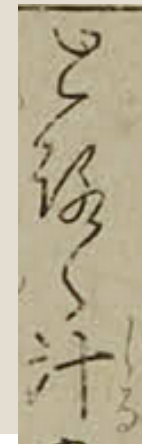
ひ



つ



と



と

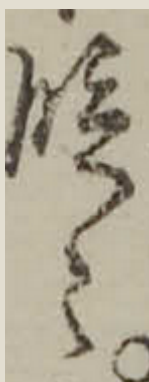
一、踊り字独特の表記方法に慣れよう

- 1 同じ
- 2 >
- 3 、
- 4 〃
- 5 同じく

おなじ
で
変換

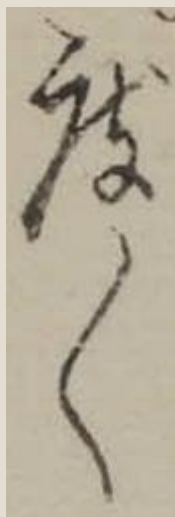
③踊り字に気づく⁻²

漢字一字
+踊り字



だんだん

段々



たびたび

度々



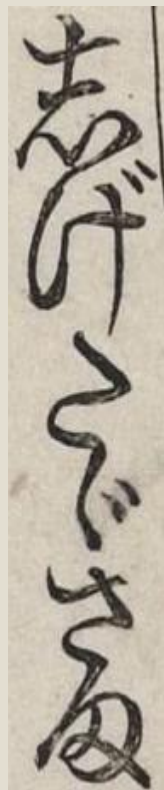
聞き愛でて

きこめて



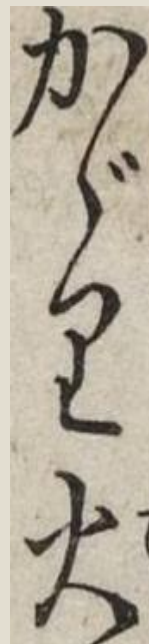
恐るは

おそるは



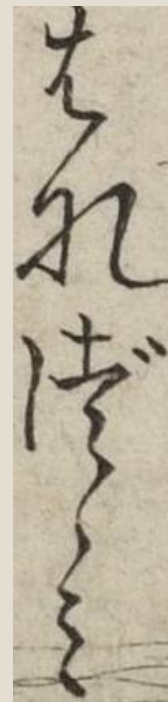
重忠様

しげさな



かがり火

かがり火



花堤

はなづみ



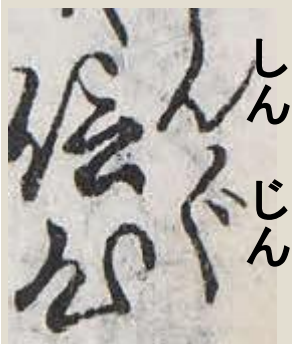
一昨年の春

おとしのはる

一、いろいろなパターンを目に入れよう

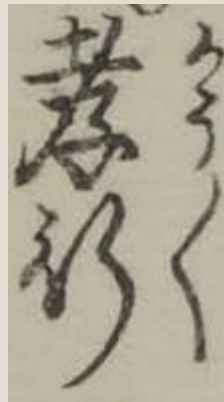
③踊り字に気づく⁻³

漢字の振り仮
名が踊り字



しん
じん

信心



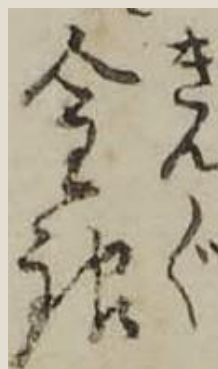
かう
かう

孝行

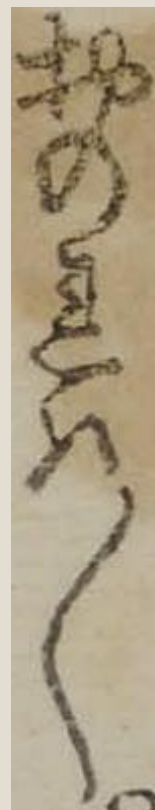


きん
ぎん

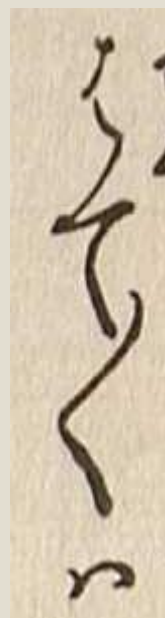
きん
ぎん



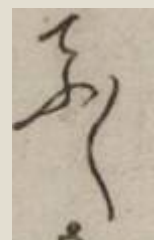
おのれ
は
おのれは



は
て
は
て
は

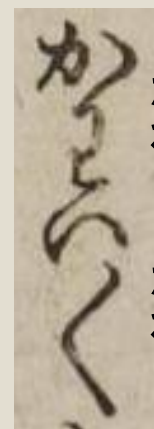


てふてふ



蝶々

かわい
かわい



きぬ
きぬ
の
別れ

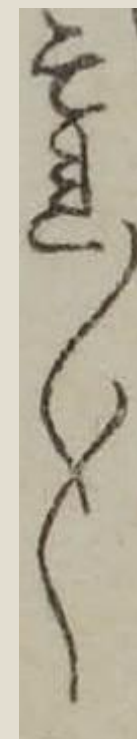


後朝の別れ

イエイエ
わたしには



それ
それ
それ



一、二文字以上の繰り返しも踊り字を多用する

／＼は「ななめ」と書いて変換を押すと出てくる

③踊り字に気づく⁻⁴

一、踊り字を見分ける

いつもそうだとはい限らないが「く」は前の字とつながることがある
踊り字の場合は原則離れる

ねたく

くよくよ

おほく

多く

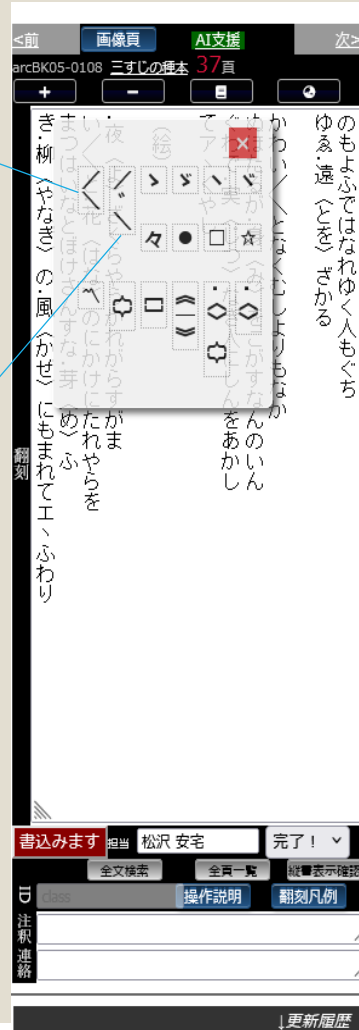
様々

さまざま

ましっつ

敢て

踊り字の出し方



さあ／＼

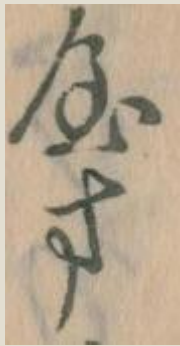
きん／＼

／＼は「ななめ」
或いは「おなじ」と
書いて変換を押すと
出てくる

④漢字か平仮名か⁻¹

ある文字を意味ある漢字とするか、ただの平仮名とするかは、読む人のリテラシーによる判断が必要です

一、漢字か平仮名かを見分ける

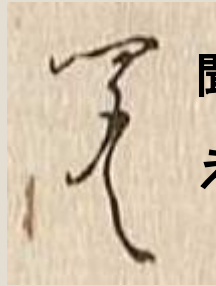


同じ本の中で
「やま」を使い
分ける。屋と万
でやまと読む

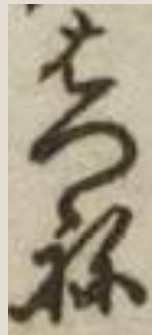
具
遊



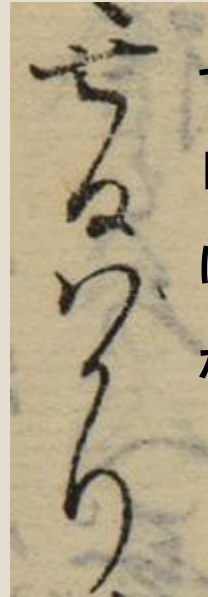
嬉しく
覚ゆる



聞え



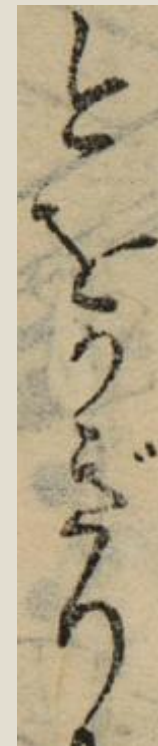
はっね



七日ばかり



ただ今



今をかぎり



ばん太

番太
火の番担当者

④漢字か平仮名か⁻²

ある文字を意味ある漢字とするか、ただの平仮名とするかは、読む人のリテラシーによる判断が必要です

一、漢字か平仮名かを見分ける

×え 清元

×下 一ト声

五色にひかる日

あらはして 農亭

大伴の大納言

裏門也

門がまえの漢字は慣れないと読みにくい

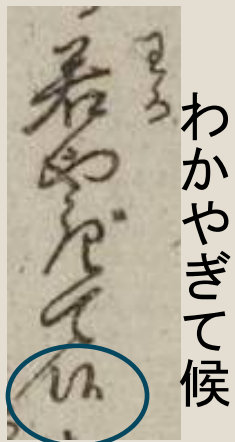
とりて等 捕手

この「ら」は「等」のことです
「ホ」に近い字となります
版本ではカタカナで「ホ」を書くことはほとんどないので「ホ」を見たら、迷わず「等」で読んでみよう

法華經 大乘經 等

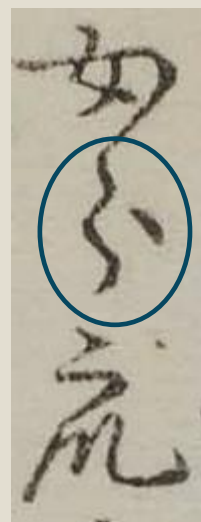
④漢字か平仮名か⁻³

縦書き表示で確認して日本語として意味が取れるかを注意深く見直してください。**わからなければ辞書を引いてみよう**



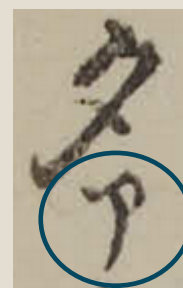
わかやぎて候

候 の崩しのバリエーションは書く人の数だけあるとも言えるほど多種多様です。これは最も基本的な崩しなので覚えよう



女郎衆

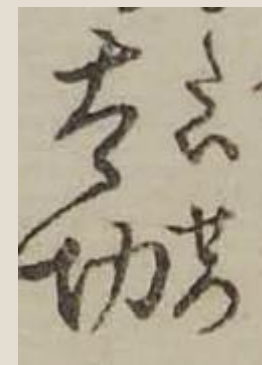
女郎の郎は崩していくうちに「ら」のようになりました。名前で頻出するので覚えるべき崩し字です衆もわりとよく出るので覚えておこう



ゆうべ
夕部

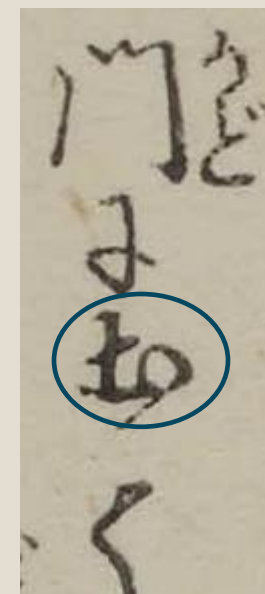
現代と意味は同じですが書き方に幅があるので、注意深く読んでみよう

部の崩しは右の旁のおおざとだけが残りました



たいせつ
太切

摺が不鮮明な場合もありますが、日本語の常識を働かせて読んでみよう



かどに出て

④漢字か平仮名か⁻⁴

しりたる事は

しりたる事は

うまゝるゝ

×み

といつ之部

といつ之部

うつす

すがたゑ

×に

おへやの小」と百も

おへやの小」と百も

×は

楚

その日ぐらし

その日ぐらし

現代では「す」
「す」と同じ字が
連なりますが、昔
は違う字で使い分
けていました。
現代人が忘れた美
意識があったよう
です

×ホ

是等

是等

⑤固有名詞に気づく

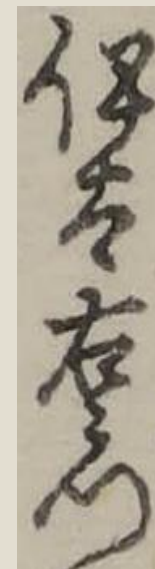
人の名前や地名などは、それと気づかないと翻刻が先に進みません。

一、名前における定型的な書き方を覚えよう

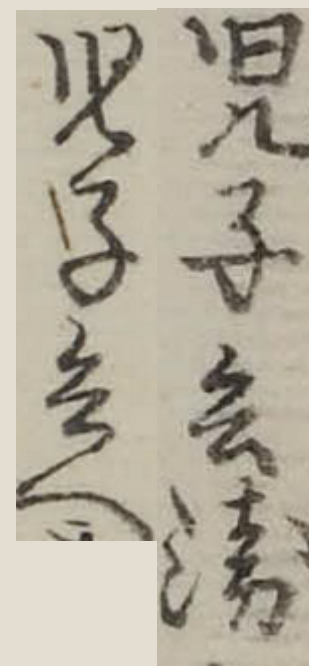
けいせい いみはりづき

『契情意味張月』の登場人物

伊太 右衛門

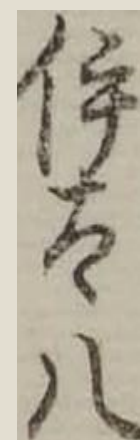


兒子 兵衛



「衛」の書き方の時の名前

伊太 八



伊太 六

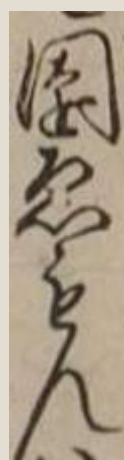


泉介せんすけ

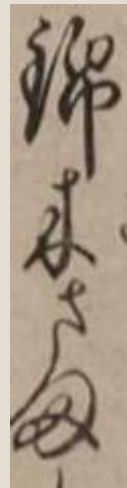


『新にしきぎ物語』の登場人物

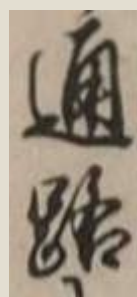
そのゑもん園右衛門



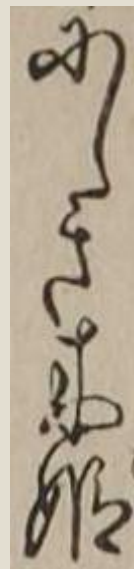
錦木 にしきぎさま



通路かよひじ



にしき木 姫



⑤固有名詞に気づく

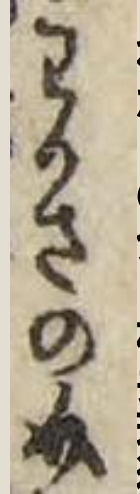
『仮名手本忠臣蔵』の登場人物はさまざまな本に登場します。人物名はもはや一般常識

一、名前における定型的な書き方を覚える

『天道大福帳』に見える忠臣蔵の登場人物

わかさの介 桃井若狭介

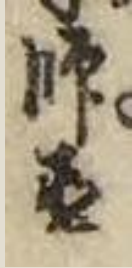
介の書き
方に注意



かほよ顔世御前（塩治判官の妻）



師直 高師直



ゑんやはん官 塩治判官



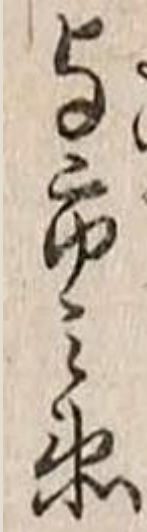
定九郎



郎の書き方に注意
ではない

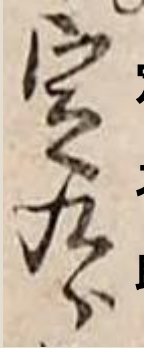
『忠臣蔵岡目評判』に見える忠臣蔵の登場人物

与市兵衛

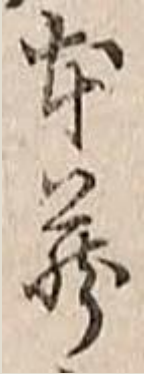


衛の書き
方に注意

定九郎

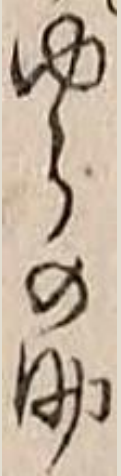


本蔵 加古川本蔵



蔵の書き
方に注意

ゆらの助 大星由良助



⑤固有名詞に気づく

名前の書き方の特徴をまとめて表示

相撲番付に見る名前の書き方

竹縄半六

秋ノ浦音右衛門

龍田山清太夫

出羽ノ森十介

岩の浜藤蔵

むさし岩久松

ハツはし文五郎

早車熊吉

三ツヶ浜虎吉

岩ヶたけ由蔵

三代ノ浦松五郎

勝ぐり渋谷衛門

戸並山軍八

石田川長吉

荒獅子男之介

加茂川卯之介

東山松蔵

柳川八五郎

藤縄平次

松ノ戸金次郎

「介」「蔵」と「郎」「次」の書き方に慣れよう

⑤固有名詞に気づく

寺社の名前

山しろの国よしみね寺

善峯寺

やまとのつぼ坂寺

壺阪寺

かはちのふぢゐ寺

葛井寺

きいの国こかは寺

粉河寺

きいの国きみゐでら

紀三井寺

西国三十三所

長樂寺

「樂」の略字は覚えておくべき字

長樂寺

芭蕉堂

松尾芭蕉は「はせを」と書かれる

ばせをどう

興正寺

かうしやうじ

「国」「寺」のくずし字は慣れておくべき漢字

おわりに

。くずし字を読むための基本的なヒントをいくつかご紹介しました。

いかがだったでしょうか 最後にまた言い訳します

今回の字例はすべてデジタル化された版本（一部番付）から切り取ってきたものです

江戸・明治のおよそ300年の間に版行された数百万とも言われる版本のほんの一部、それも状態のよいものを選んで抜き出したものです。実際に古書店などで版本を手にとって見ても汚れカスレ、破れ、虫食い等があって、さあ読んでみようという気持ちになかなか成れないのが本当のところですよ。

「読む」ということに限って言えば、デジタルアーカイブはあらゆるジャンルから状態のよい本を選んで、時にはA Iの助けを借りながら、読み進めることができる優れたシステムだと思います。多くの天災、火災、戦争をくぐりぬけて今にある本は貴重な文化資源です。

これからも当時の人々と会話するようにつもりで読み進めていただければと念願しております。

安宅 望 拝